日文教授用資料［小学校社会］

授業力アップ↗を目指す先生のための
社会科のABC
評価編

日文のWebサイト

日文 🔍

※本冊子掲載二次元コードのリンク先コンテンツは予告なく変更または削除する場合があります。
本資料は、一般社団法人教科書協会「教科書発行者行動規範」に則り、配布を許可されているものです。

心が動く、その先へ。
日本文教出版

はじめに

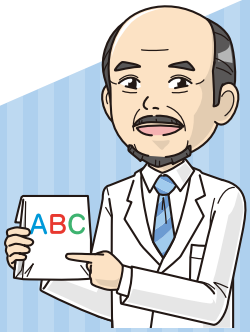
“先生のあの一言で私の個性が芽生え、その後の人生で大輪となって花開いた。あの一言が無ければ今の自分は存在していない。”

この先生の一言こそが評価の目指すべき姿であり、教師にとっての評価の醍醐味である。私はそう考えています。

しかし、理想と現実との間には高い壁があります。子どものよさや可能性を積極的に評価したいのですが、どんなに頑張っても最後には『C』を付けざるを得ない。そうした評価のジレンマに陥ってしまうことがあるのではないでしょうか。

こんな悩みを解決する“とっておきの処方箋”があります。それは評価観を問い直すことです。“子どもが自らの力を最大限に発揮して学習に取り組む。この子ども主体の問題解決を支援するのが社会科の学習評価である”という評価観への転換です。

本書は、この評価観の転換を図り、評価を無理なく、無駄なく、効果的に進めていくために必要となる評価の基礎的な理解と進め方のポイントを解説した「社会科の学習評価の実践書」です。本書を手に取り、子どもの豊かな成長を促す評価を実践してみませんか。



もくじ

はじめに

①評価はどうして必要なの？ …… 3

②これまでの評価と何が変わったの？ …… 4

③今こそ“目標と指導と評価の一体化” …… 5

④評価のそれぞれの観点では何を評価するの？ …… 7

⑤評価規準をどのように設定したらよいの？ …… 8

⑥単元の評価をどのように進めたらよいの？ …… 10

⑦いつ、どんな場面・方法で見とり評価するの？ …… 11

⑧1時間ごとの評価をどのように進めたらよいの？ …… 12

実践編 “これならできる！”
単元を見通した評価の実際 …… 14

⑨個に応じた指導の充実と個別最適な学び …… 22

⑩協働的な学びへと誘い込む
“よさや可能性の見とりと評価” …… 23

実践編 個別最適な学びと
協働的な学びの充実を目指す評価の実際 …… 24

おわりに

学期末が近づいてきたし
評価も考えないとなあ…
！
評価のためにきちんと
記録しなきゃ。
でもすごくたいへん!!
そうなの!?
どうしよう!?
今からでも間に合う!?
私って
頑張りすぎ…？
そんなときは
ぼくに任せて！
!?
!?
そもそも、
評価は何のために
していると思う？
？
？
評価は
●子ども一人一人の
学習状況を把握し、
きめ細やかな指導を行い、
学習改善につなげる
●教師の指導改善に
つなげる
ために必要なんだ。
子どもの学習のためにも
自分の指導のためにも
評価は大切なんだね。
学期末だけでは
だめだね…。
むずかしい…
うーん
次のページから
いっしょに
評価について
学んでいこう!!

1 評価はどうして必要なの？

小学校学習指導要領（平成 29 年告示）第１章　総則では、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善とともに学習評価の充実という項目を設け、次の配慮事項を示しています。

❶ **児童のよい点や進歩の状況などを積極的に評価し、学習したことの意義や価値を実感できるようにすること。また、各教科等の目標の実現に向けた学習状況を把握する観点から、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら評価の場面や方法を工夫して、学習の過程や成果を評価し、指導の改善や学習意欲の向上を図り、資質・能力の育成に生かすようにすること。**

❷ **創意工夫の中で学習評価の妥当性や信頼性が高められるよう、組織的かつ計画的な取組を推進するとともに、学年や学校段階を越えて児童の学習の成果が円滑に接続されるように工夫すること。**

つまり、資質・能力の育成を目指すこれからの教育では、授業改善と学習評価の充実が実践課題となっているのです。

ところがその一方で「資質・能力の評価は難しい」や「タブレット型端末の活用を含め学習指導に手いっぱいで評価に力を入れる余裕がない」という悩みを耳にします。そうした学校現場の実態や先生方の悩みを受け、本冊子では“社会科の評価を無理なく、無駄なく、効果的に進めていくために必要となる事柄を解説する”とともに、具体的な事例を交えて“社会科の学習評価の進め方のポイントやアイディア”をご紹介したいと思います。

それでは、はじめに、「評価がどうして必要なのか」を一緒に考えてみましょう。

読者の皆さんは「社会科の評価」という言葉から、どんな事柄を思い浮かべますか。

１つ目は、「教師が子どものよい点や進歩の状況を捉えて値ぶみをする」という、いわば“社会科学習における子どもの学びの成果に対する評価”ではないでしょうか。具体的には、日々の社会科学習において、個々の子どもがどんな資質・能力をどれくらい身につけることができたのかを捉え、記録に残して蓄積し、それらを総括して通知表や指導要録を作成するなどの教師の営みがこれに当たります。

２つ目は、「上記の営みを行うなかで、教材や指導計画、教え方などの良し悪しを評価して必要な改善を加える」という“社会科学習指導の改善や個々の子どもに寄り添った指導に生かす評価”ではないかと思います。具体的には、教師が本時の目標の実現を目指して子どもたちに働きかけ、資料や学習活動を工夫して指導したのに、教師が求める反応が十分に得られなかったと評価した際、写真や動画などの補助的な資料を付け加えたり、つまずいている子どもに助言を与えたりするなど全体に対する指導の改善や個に応じたきめ細かな指導を行うことがこれに当たります。

これらの学習評価は、「子どもにどういった力（資質・能力）が身に付いたか」という学習の状況を的確に捉え、より一層の成果を挙げるために教師が指導の改善を加えることにより、“目標に掲げた資質・能力をより多くの子どもたちが確実に身に付けていけるようにする”という極めて重要な教師の営みなのです。

その鍵となるのが「目標に準拠した評価」に対する理解、「目標と指導と評価の一体化」を図る指導プランの作成、「子どもに返す評価」の工夫などです。

2 これまでの評価と何が変わったの？

中央教育審議会の報告書や文部科学省からの通知、国立教育政策研究所の参考資料などを手掛かりにして、今の学習指導要領が求めている評価がこれまでの評価と異なる点は何か、なぜそのように変わったのかなどについて読み解いていきたいと思います。

1 評価改善の３つの基本方針とは

中教審教育課程部会では、「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」の中で、教師の働き方改革が喫緊の課題となっていることも視野に入れ、現場の実態を考慮して、「評価改善の基本となる３つの方針」を掲げています。

❶ **児童生徒の学習改善につながるものにしていくこと**
❷ **教師の指導改善につながるものとしていくこと**
❸ **これまで慣行として行われてきたことでも、必要性・妥当性が認められないものは見直していくこと**

この❶と❷については、決して新しいものではありません。学習評価を通して子どもたちの学習状況を的確に捉え、そこでの評価情報に基づいて個に応じた指導を行ったり、指導計画や学習活動の見直し・改善を行ったりするなどの「指導と評価の一体化」については、これまでもその大切さや必要性が指摘されてきました。心ある教師はそれを行うために、ねじり鉢巻きで時間を超越して、日々努力を積み重ねてきたのです。

しかし、「教師の働き方改革」が求められている今、従来のままでよいはずはありません。❸で指摘されているように、**これまで慣行的に行ってきた取り組みにメスを入れ、必要性・妥当性が認められないものについては見直し・改善を加えていくことが必要**です。

2 「指導と評価の一体化」の推進を図るために

必要性・妥当性が認められないものとは何か。その１つが補助簿などへの事細かな評価記録の蓄積です。単元の学習を進める過程で、観点ごとに評価した全員の記録を残し、総括的な評価を導き出すという、いわば事務的な作業に膨大な労力が割かれてきたのです。

これでは、本末転倒です。そもそも指導要録の評価において、現在行われている観点別学習状況の評価と評定のどちらについても、「学習指導要領に定める目標に準拠した評価」に改められたのは、平成 13 年の指導要録改訂の時からです。そのねらいは、児童生徒一人一人の進歩の状況や教科の目標の実現状況を的確に把握し、学習指導の改善に生かすことだったのです。

このように、今求められている「指導と評価の一体化」とは、平成 13 年から一貫して進められてきた“目標の実現状況を的確に把握し、学習指導の改善に生かす評価”すなわち**「目標に準拠した評価」**であり、それを確実に推進していくためには“必要性・妥当性が認められないものを見直していく”必要があるのです。

それでは、これまでの慣行について何をどのように見直し、改善していったらよいのでしょうか。

そのヒントとなる考え方や参考となる事例などをまとめたものが、「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」（国立教育政策研究所）です。

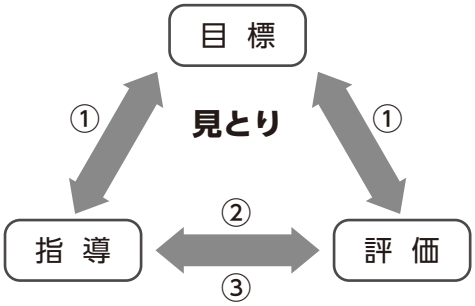
この資料の最大の特色は、観点別学習状況の評価の進め方について、“指導に生かす評価は毎時間行うが、全員の学習状況を記録に残す場面については精選する”というアイディアです。

3 今こそ“目標と指導と評価の一体化”

1 目標と指導と評価の一体化とは

これからの社会科においては、目標に準拠した評価が目指している、目標に掲げた資質・能力がすべての子どもに身に付くよう指導と評価の一体化を推進していくことが強く求められています。

それを行うには、以下の図に示す通り、「目標と指導と評価の一体化」を念頭に置いた社会科の授業づくりを心がけていくことが大切です。



①目標実現を図る確かな指導と評価の計画・実施
②学習状況の丹念な見とりと適切な評価
③評価情報に基づく個に応じた指導・支援

さらに社会科では、指導計画の作成において「単元など内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む資質・能力の育成に向けて、児童の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにする。その際、学習の問題を追究・解決する活動の充実を図る」ことが必要です。**問題解決的な学習の充実を通して主体的・対話的で深い学びの実現を図り、社会科が目指す資質・能力を一体的に育成することが求められている**のです。

2 目標と指導と評価の一体化を図る３つのポイント

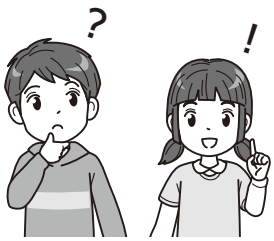
上記の事柄を意識して、次の３つの場面での評価に力を入れていくことがポイントです。

1．学習問題をつくる場面での評価

社会科において、子どもが主体的に学ぶ引き金となるのが、ある事実との出会いから生まれてくる「！」（気になること）や「？」(素朴な問い）の発見です。この**「！」や「？」を引き出す学習場面こそが全員参加の問題解決へと子どもたちを誘う出発点**です。そのことを踏まえ、子どもが自分の「！」や「？」をノートやタブレット型端末に表出したり互いに共有したりする場面（活動や時間）を保障し、そこでの学習状況を見とり、個別に指導・支援していくことがまず必要です。

2．学習問題を追究する場面での評価

自分の「！」や「？」にこだわりをもった子どもは、問題追究の過程で「本当はどうなのか？」を常に意識しながら情報を集め、読み解き、「ズバリ私の考えはこれだ！」などと、自分の考えをつくり上げていきます。その個々の考えを共有する過程で、自分とは異なる考えをもつ他者が気になります。そうした他者との対話的な学びへと子どもたちを導くには、**考えを見える化する表現活動を工夫するとともに、個々の子どもの考えのよさや可能性を見とり評価することが大切**です。



3．学習問題を解決する場面での評価

異質な他者と互いの考えを吟味・検討し合う過程を経て、いずれの考えも甲乙つけ難いという社会科らしい結論へと子どもの考えを導いていくことが大切です。その積み重ねを経て、物事を多面的・多角的に考える力を養っていきたいものです。そのためには、個々の子どもの考えを見とり評価した情報を活用し、教師が子どもたちに意図的に働きかけ**「本当はどうなのか？」など、子どもたちが立ち止まって考えたくなる学び合いの場面を導き出す**ことも１つの工夫です。

目標
指導
評価
なるほど
この３つの一体化を図って授業づくりをしていったらいいんだね。
じゃあ実際にどうしたらいいのかな？
ではまず評価の観点からみていこう！
（1）知識・技能
（2）思考・判断・表現
（3）主体的に学習に取り組む態度
評価はこの３観点だよね。
（1）はテストで評価していたな〜。（2）や（3）は…？
この３つの観点について評価規準を設定して、
1 学習問題をつくる場面
2 学習問題を追究する場面
3 学習問題を解決する場面
で評価をしていくよ。
子どもの問題解決の流れにそって評価していくのか。でも、どうやって？
次のページを読んでみよう！

4 評価のそれぞれの観点では何を評価するの？

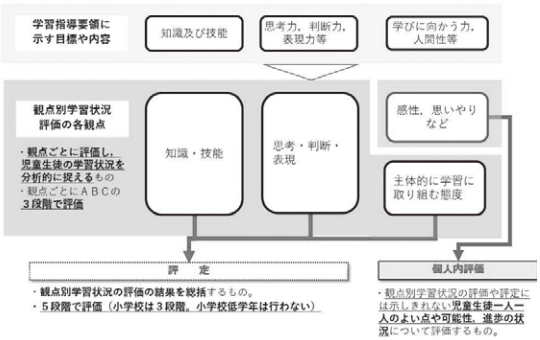
1 目標及び内容の示し方の改善と評価の観点

各学校で評価規準を設定し、効果的に活用していくには、評価のそれぞれの観点で何を見とり、どのように評価するのかを共通理解しておくことが必要です。

平成 29 年版学習指導要領では、平成 20 年版の目標及び内容の示し方を「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の３つの柱で再整理しています。これを受け、この３つの資質・能力をそのまま観点別学習状況評価の観点とするよう改善が加えられました。

学習評価の実際においては、これまで通り学習状況を分析的に捉える「観点別学習状況の評価」とそれらを総括的に捉える「評定」の両方を用いて、学習指導要領に定める目標に準拠した評価を行っていきます。

その際、目標の３つの柱の１つである『学びに向かう力、人間性』のうち、『誇りや愛情』など観点別学習状況の評価や評定になじまないものについては、個人内評価により、一人一人のよい点や可能性、進歩の状況などを積極的に捉えて評価し、子どもに伝えるようにしていくことが大切です。



〈出典：「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 小学校社会８頁　2020年国立教育政策研究所〉

2 評価の観点で見とり評価する子どもの姿

それでは、社会科の評価のそれぞれの観点において、子どもの学習状況のどのような姿を見とり、評価していくのでしょうか。

◆「知識・技能」の観点では

①問題解決的な学習の過程において、どんな知識・技能を習得したのかを見とり評価する。

②それらの知識・技能を活用して学習問題を追究・解決する学習を行った結果として、学習のテーマについてどのような社会的意味を理解したのかを見とり評価する。

◆「思考・判断・表現」の観点では

①見方・考え方を働かせて学習問題に向かう問いを見出し、その追究を通して捉えた事実について、どんな意味づけ・解釈を行い、それをどのように表現しているのかを見とり評価する。

②上記の過程で捉えた社会のしくみや人々の働きなどについて、比較･関連･総合したり地域の人々や国民の生活と関連付けたりしながらその意味を考えたり、学習したことを基に社会への関わり方を選択・判断しているかを見とり評価する。

※②の後半については、必要に応じて評価する。

◆「主体的に学習に取り組む態度」の観点では

①学習するテーマについて興味・関心を抱き、自ら予想や追究計画を立て、学習を振り返ったり見直したりして主体的に学習問題を追究・解決しようとしているかを見とり評価する。

②よりよい社会を考え、学習したことを社会生活に生かそうとしているかを見とり評価する。

※②については、必要に応じて評価する。

5 評価規準をどのように設定したらよいの？

1 学習指導要領における評価規準

これからの社会科の授業づくりでは、資質・能力をすべての子どもに確実に身に付けるために「目標と指導と評価の一体化」を意識して、問題解決的な学習の充実を図ることが強く求められています。その実施に当たり、まず必要なことは目標の実現を図る確かな指導と評価の計画を作成することであり、そのポイントとなるのが評価規準の設定です。

この評価規準の設定について、「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料（国立教育政策研究所）には、次のような解説が加えられています。

学習指導要領に示す各教科等の「第２ 各学年の目標及び内容」の「２ 内容」において、「内容のまとまり」ごとに育成を目指す資質・能力が示されている。このため、「２ 内容」の記載はそのまま学習指導の目標となりうるものである。学習指導要領の目標に照らして観点別学習状況の評価を行うに当たり、児童生徒が資質・能力を身に付けた状況を表すために、「２ 内容」の記載事項の文末を「～すること」から「～している」と変換したもの等を、本参考資料において「内容のまとまりごとの評価規準」と呼ぶこととする。

つまり、評価規準はそれに照らして観点ごとに目標の実現状況を評価するために設定するのだから、評価の観点と同じ枠組みで示されている「２　内容」の記載事項の文末を「～している」と改めたものを評価規準とするというのが、参考資料の考え方です。

2 評価規準（criterion）とは

それでは、これまでどのようにして評価規準を設定し、どのように活用してきたのでしょうか。

目標を実現した子どもの学習状況を観点別に思い描き、子どもの具体的な姿（学習の状況）として記述したものが評価規準（criterion）です。

単元を通した問題解決的な学習の過程で、この評価規準を用いて、「努力を要する」状況と判断される子どもの有無を把握し、必要に応じて、その都度手厚く指導・支援していく。つまり、学習の過程における評価とそれに基づく個に応じた指導・支援を行うために、「おおむね満足できる」状況と判断される子どもの学習状況の具体的な姿（「十分満足できる」状況と判断されるものを含む）を評価規準として設定し、それに照らして子どもの学習状況を見とり評価してきました。

評価規準を設定する際、難しいのは「思考・判断・表現」の観点です。思考力・判断力・表現力については知識や技能と異なり、その実現状況を量的ではなく質的な面で見とり評価しなければならないからです。「主体的に学習に取り組む態度」の観点も同様です。

ところで、単元等の目標や評価規準の設定は、教育課程を編成する主体である各学校が、学習指導要領に基づいて子どもや学校、地域の実情に応じて行うことが原則です。そのことを踏まえ、各学校では、目標に準拠した評価を進める際、生きて働く評価規準を設定することが大切であると考えています。

なお、各学校において単元の目標及びその評価規準を設定する際、学習指導要領のそれぞれの内容の記述や学年目標、内容の取扱いのどこをどのようにおさえる必要があるのかを知っておくと便利です。

以下、参考までにその着眼点や設定の手順を挙げておきます。詳しくは「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料（国立教育政策研究所）を参照してください。

3 単元目標を設定する際の着眼点

（１）「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」

社会科のそれぞれの内容については、以下の文型が用いられています。

（○）Aについて、学習の問題を追究・解決する活動を通して、次の事項を身に付けることができるように指導する。

ア　次のような知識や技能を身に付けること

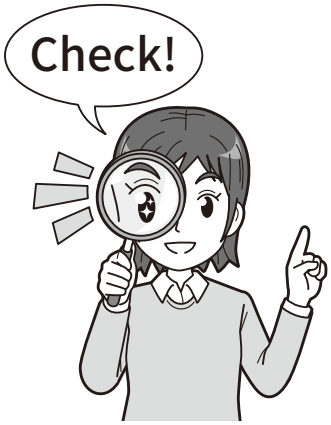
（ア）Bを理解すること

（イ）C（調査活動、具体的資料・基礎的資料）で調べ、Dなどにまとめること

イ　次のような思考力、判断力、表現力を身に付けること

（ア）Eなどに着目して、Fを捉え、Gを考え、表現すること

ここに示された内容のまとまりを受けて単元を設定していくことになります。その際、問題解決的な学習を通して、上記アの「知識及び技能」、イの「思考力、判断力、表現力等」が一体的に身に付くような学習活動を展開していくことが求められています。それを踏まえ、「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」に関する目標を、次のように設定することができます。



○Eなどに着目して、Aについて学習問題を見出し、Cで調べ、Dなどにまとめ、Fを捉え、Gを考え、表現することを通して、Bを理解できるようにする。

（2）「学びに向かう力、人間性等」

「学びに向かう力、人間性等」に関わる目標については、各学年の目標（3）に基づいて設定します。

例えば、第３学年、第４学年の目標は「社会的事象について、主体的に学習の問題を解決しようとする態度や、よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする態度を養うとともに、思考や理解を通して、地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚を養う。」です。この前段を受け、「主体的に学習問題を追究・解決しようとする態度を養う」という「学びに向かう力」に関わる目標を設定します。さらに、内容の取扱いの配慮事項において、社会に見られる課題を把握し、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断するなどの学習を求めている場合には、「～の発展について考えようとする態度を養う」や「～など、自分たちにできることを考えたり選択・判断したりしようとする態度を養う」などを加えて目標を設定する必要があります。

4　評価規準を設定する際の着眼点

問題解決的な学習のプロセスにおいて、重点的に見とり評価する観点の具体的な評価規準を設定します。

（1）「知識・技能」

①Eなどについて、Cなどで調べ、必要な情報を集めて読み取り、Fを理解している。

②調べたことをD（図、文章など）などにまとめ、Bを理解している。

（2）「思考・判断・表現」

①Eなどに着目して、問いを見出し、Fについて考え、表現している。

②（比較、関連、総合などの思考により）Gを考えたり、学習したことを基に社会への関わり方を選択・判断したりして、適切に表現している。（後半部分は、必要に応じて設定する）

（3）「主体的に学習に取り組む態度」

①A（に関する事項）について、予想や学習計画を立て、学習を振り返ったり見直したりして、学習問題を追究し、解決しようとしている。

②よりよい社会を考え、学習したことを社会生活に生かそうとしている。（必要に応じて設定する）

6 単元の評価をどのように進めたらよいの？

1 単元を通した評価とは

社会科では、観点別にこま切れの授業を行うわけではありません。内容のまとまりごとに単元を設定し、問題解決的な学習を通して一人一人の子どもが「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」などの資質・能力を一体的に獲得できるような学習活動を連続的に展開し、その過程でそれぞれのねらいを受け、目標の実現状況を評価していきます。

この単元を見通した評価について、以下の第４学年内容（３）を事例に取り上げ、具体的に述べていきます。

（３） 自然災害から人々を守る活動について、学習の問題を追究・解決する活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 次のような知識及び技能を身に付けること。

（ア）地域の関係機関や人々は、自然災害に対し、様々な協力をして対処してきたことや、今後想定される災害に対し、様々な準備をしていることを理解すること。

（イ）聞き取り調査をしたり地図や年表などの資料で調べたりして、まとめること。

イ 次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること。

（ア）過去に発生した地域の自然災害、関係機関の協力などに着目して、災害から人々を守る活動を捉え、その働きを考え、表現すること。

2 問題解決のプロセスに即して各観点の評価を行う

この内容（３）については、例えば、次に示す問題解決的な学習の過程において、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の資質・能力を連続的・一体的に育み、評価していきます。

◇学習問題を見出す過程では

単元の導入では、自然災害から人々を守る活動に対する問題意識が芽生え、醸成されるように事実認識を積み重ね、「主体的に学習に取り組む態度」や「知識・技能」に関わる評価を行います。さらに、問題意識が醸成され、解決したい「？」（素朴な問い）を見出し、その問いに対する予想（推理・推論）を考え、問題解決の道筋や方法などを考える学習において「思考・判断・表現」の観点を設けて評価します。

◇学習問題を追究する過程では

学習問題の追究過程では、過去に発生した地域の自然災害、関係機関の協力などについて、聞き取り調査や地図、年表その他の資料で調べ、学習問題の解決に必要な事実（知識・情報）を集め、まとめることにより、災害から人々を守る活動の様子を捉える学習を行い、「知識・技能」の観点を設けて評価します。

さらに上記の活動を通して獲得した知識・情報を関連付けたり総合したりして災害から人々を守る活動の働きを考え、表現する学習において「思考・判断・表現」の観点を設けて評価します。

◇学習問題を解決する過程では

学習問題を追究・解決した結果として、地域の関係機関や人々が自然災害に対して様々な協力をして対処してきたことや、今後想定される災害に対し、様々な準備をしていることを理解していく学習において「知識・技能」の観点を設けて評価します。さらに、これまでの問題解決的な学習の成果を生かし、自分たちにできることを考え、選択・判断する学習において「思考・判断・表現」と「主体的に学習に取り組む態度」の観点を設けて評価します。

7 いつ、どんな場面・方法で見とり評価するの？

社会科における評価のタイミングは、大きく分けて２つあります。

1 問題解決的な学習のプロセスでの評価

ここでは、単元の各時間の目標が実現されているか否かを見とり評価していきます。そして、ある子どもについて、そのまま手立てを講じなければ目標の実現が難しいと教師が診断した場合、その子のつまずきなどの状況に応じて指導・支援を行い「努力を要する児童」を出さないようにしていきます。形成的評価とも呼ばれ、言語やその他の方法で可視化された子どもの学びの姿を見とり評価していきます。

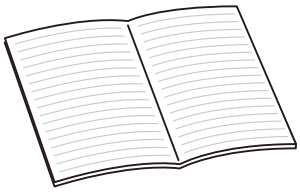
そのポイントは、各時間の目標を実現する上で必要不可欠な学習活動と一体化した評価方法を工夫することです。

◇「知識・技能」の観点の評価

①学習問題の追究過程でどんな知識・技能を習得したのか

⇒見学や聞き取り調査による追究活動における見学中のメモ、見学後にまとめた文章などの記述内容で評価

⇒資料の選択・収集、読み取りによる追究活動における資料の集め方や選び方（観察）、資料への書き込みやノートへの読み取りメモ等の記述内容



②学習問題を追究・解決する学習の結果、どのような意味理解に至ったのか

⇒学習問題に対する自分の考えを文章や関連図その他の表現物にまとめたり説明したりしたときの記述や発言の内容で評価

◇「思考・判断・表現」の観点の評価

①学習問題に向かう問いを見出し、その追究過程で捉えた事実をどのように意味づけ・解釈し、表現しているのか

⇒社会的事象との出会いにおけるノートや短冊カード、タブレット型端末などにメモした疑問や問い、予想、調べ確かめたいことなどに関する記述内容で評価

②比較・関連・総合したり国民の生活と関連付けたりしながら、社会のしくみや人々の働きなどの意味をどのように考え表現しているのか

⇒考えたことを見える化（可視化）して表現する活動において表出した図や言葉、文章などの記述内容で評価

③社会の発展や課題の解決に向け、どのような関わり方を考え、選択・判断しているか

⇒課題と解決策、立場、理由や根拠などを明確にした文章の記述や伝え合う活動における発言内容で評価

◇「主体的に学習に取り組む態度」の観点の評価

①学習問題を捉え、見通しをもって追究したり、学習を振り返ったり見直したりして学習問題を追究・解決しているか

⇒学習問題に対する考え（予想や推理）、追究の意欲や見通し、深まった問いや追究方法等の改善などに関わる発言、ノートや振り返りカードの記述の内容で評価

②よりよい社会を考え、学習したことを社会生活に生かそうとしているか

⇒自分事として捉え、互いの考えを表現し合う活動の記述や発言の内容で評価

2 単元の終末または学習の終了後の評価

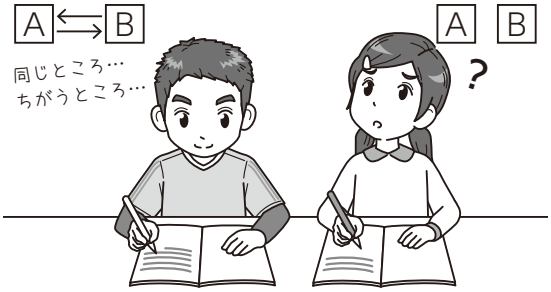
単元、学期や学年全体の学習成果として、子どもがどのような資質・能力を身に付けたのかを総括的に評価します。単元ごとの観点別学習状況を総括したり、ペーパーテストなどで「知識・技能」の習得状況を評価したりして、最終的にはここでの評価情報を通知表や指導要録の作成などに活用します。

8 1時間ごとの評価をどのように進めたらよいの？

社会科ではすべての子どもが主役です。子ども一人一人が学習問題を追究・解決していく過程で、教師が設定した目標を実現していく「子ども主体の問題解決」が求められているのです。

この目指すべき授業へと一歩一歩近づけていくには、教師による指導の工夫とあわせて、**その指導が子ども一人一人にどの程度届いているのか、すなわち指導の成果を目の前の子ども一人一人の学びの姿で確かめ、よりよい指導へと改善していくことが大切**です。

この「子ども一人一人に対する指導と評価の一体化」こそが１時間ごとの評価の究極の目的であり、以下、その進め方のポイントとアイディアを紹介します。



1.「努力を要する＝C」の子どもを出さない評価

①本時の目標が「おおむね満足できる」（Aを含むB）と判断される子どもの学びの姿（反応）を事前に教師が具体的にイメージして授業に臨む。

②本時の目標の実現状況を見とり評価する場面（学習活動の山場）を１つか２つに絞り込み、可能な限り、子ども一人一人に寄り添う形で、子どもの手もとや表情を見とり、言葉かけをする。

〈言葉かけの例〉

第５学年「稲作の盛んな地域」の圃場整備と機械化の授業では、２つの資料を関連付けて読み取る場面でつまずきが予想される。そこで、まずそれぞれの資料を読み取る際の基本情報などを全体で確認した上で、「資料を関連付けて読み取ると、どんなことが言えるか」「気になることは何か」などをノートに自力でメモする活動を行う。この学習場面で子どもの取りかかりの状況や表情、ノートへの記述の内容などを見とり、例えば、次の言葉かけを行っていく。

・「いいね、その調子で進めて！」
・「ここの詳しい説明が知りたいな。付け足せる？」
・「この考えは、どの資料のどこから言えるの？」

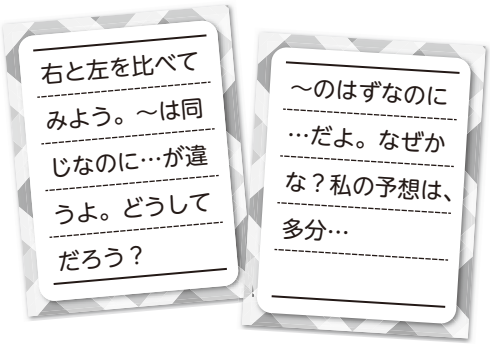
なお、上記の言葉かけに加え、教師が『赤ペン先生』となってスピーディーなノート指導を行うアイディア（右頁のコラム『赤ペン先生の高速ノート指導』）も、参考にしてください。

③「努力を要する＝C」と判断される子どもに対して、その子のつまずきの原因を探り、その子に必要かつ最適な支援の仕方を考え、提案する。

〈提案の仕方の例〉

○言葉かけによる確認や提案

○ヒントカードなどによる提案



などの言い表し方（話型）を用いて表現することを提案する。

2．本時の学びを次時以降につなげる評価

個々の子どもが調べて得た情報を活用し、学習問題に対する自分の考えを「ズバリこれだ！」カードなどに表現する学習を行います。そして、カードを

写真に撮りタブレット型端末で投稿するなどの方法で、すべての子どもの考えを見とり評価します。

その上で、次の点に留意して、どうすれば子どもの考えに埋め込まれたよさや可能性を引き出せるのかをシミュレーションし、対話的・協働的な学びへと誘い込むしかけ（手立てや方策）を編み出していきます。

・どんな考えをしている子どもがいるのか
・導入の場面でどの考えを取り上げるのか
・それをどの考えと関連付けるのか

3．互いのよさを認め合い、学び合う相互評価

互いのよさを認め合い学び合うために、相互評価を工夫することも大切です。例えば、タブレットに投稿された考えを子どもが互いに読み比べます。その上で次のような学習活動へと導いていくのです。

○「いいね！」サインを送り合う**「いい考えをもらっちゃおう」**タイムを設けて互いの考えを共有し合う
○質問や意見を出し合うなどの**「聴き合い・言い合い」**タイムを設けて互いの考えを吟味・検討し合う

4．主体的な学びを促す自己評価

本時のまとめの段階で、子どもが自らの学びの状況を振り返る（自己評価する）場面を工夫して、主体的に学習に取り組む態度を育てていくことが大切です。次の例を参考にして、子どもに何を問いかけ、どんなことを記述させるのかを工夫することが大切です。

・「今日の学習でなるほど！と納得した考えは？」「私の学びは（花丸・丸・ＯＫ）です。それは～だからです。」⇒『**学びの手応えの実感**』
・「気になる・スッキリしないことは？新たな疑問は？」「どのように解決したい？」⇒『**学習計画の見直し**』

5．全員の学習状況を記録に残す評価

単元全体の総括的な評価を行うために、それぞれの観点で必要不可欠な場面を厳選し、すべての子どもの評価情報を記録に残していきます。評価の妥当性、信頼性を担保するためです。

コラム

『赤ペン先生の高速ノート指導』

授業後にノートを集め、子どもが授業で学んだことや考えたこと、疑問などを書いた文章などに目を通すことは、すべての子どもの学習状況を把握する意味でとても大切です。そのノートの記述に対して、教師がコメントを書いて子どもに返すことは、個々の子どもの学習状況に応じた指導・支援となりその効果が期待できます。しかし、その一方で、「ノート指導に時間と労力を割かなくてはならず大変だ」などの悩みをよく耳にします。ノート指導が必要なのは社会科だけではありませんから、教師にかかる負担は多大です。

この悩みに応えるアイディアが「赤ペン先生の高速ノート指導」です。子どもがノートに向かい自力で学ぶ時間を授業内に設け、教師が子どもたちの間を回り、できるだけ多くのノートをチェックしてしまうのです。成功の秘訣は次の３つです。

①教室を歩き回るコースを決めておく
②一人一人にかかわる制限時間を決めておく
③チェックサインを決めておく（以下がサインの例）

◇『ＯＫ！サイン』：「ＯＫ！順調・順調。その調子だ。自信をもってそのまま続けていいよ。」この気持ちを伝えるために、赤ペンで『ＯＫ』とサインする。
◇『花丸アンダーライン』：『花丸』をサインし、ノートの言葉や文章にアンダーラインを引く。「この考え（言葉や文章）すごくいいね。花丸だ！絶対に手を挙げて発表してね」という気持ちを伝える。
◇『花丸 Very Good』：サインの直後に「どこが、どのようにいいのか」を言葉で伝える。それを聞いた子どもが教師の言葉を赤ペンで書き留める。教師は授業後に認めの印を押す。この約束を徹底すると、教師が寸評を書く手間を省くことができる。

〈参考文献「授業実践ナビ社会」拙著　文溪堂〉

“これならできる！”単元を見通した評価の実際

～目標と指導と評価の一体化、観点ごとの評価場面と評価方法、観点別評価の総括～

では、単元を見通した評価について、第５学年「情報を生かして発展している産業」の現場の先生の実践例を紹介します。

1 目標と指導と評価の計画

（1）小単元の概要

導入では、子どもに身近なモナカアイスクリームの実物を提示し、興味・関心を高めました。そして、「パリパリなアイスクリームを販売するために、『ある情報』が活用されています」と投げかけ、問いを引き出しました。

アイスクリームは、売れ行きが気象に左右される商品です。しかし、モナカアイスクリームは作り置きしてしまうと鮮度（パリパリ感）を維持することができないため、適切な需要予測をして生産計画を立てなければなりません。そこで、アイスクリームを作る会社では、日本気象協会（JWA）による「気象売上予測」の情報を活用して生産計画を立てています。それを教材として取り上げました。

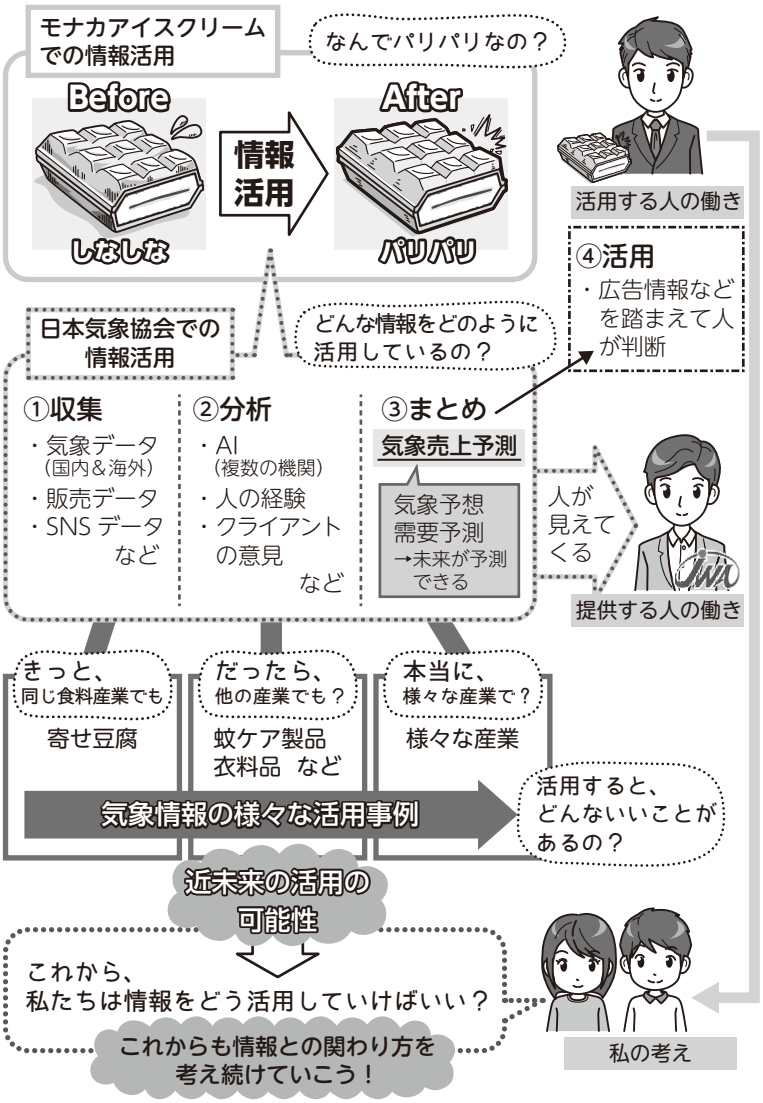
子どもは、気象と商品、商品をつくる会社と気象情報を提供している会社との関連性や気象情報を活用している「人」の役割に着目していきました。その結果、「情報」を抽象度の高いものと捉えていた子どもが、「人」の役割に目を向け、自分とのつながりを意識し、実感的に捉えることができるようになりました。

単元の後半では、「気象情報を活用し、他にどのような課題が解決されているのだろう」という子どもの問いをもとに、他の産業における気象情報活用の現状や今後の在り方について調べたり、これからの情報活用の可能性を探ったりして、情報化社会のよさや課題について考えを広げ、小単元の学習を終えました。

（2）小単元の構想図

子どもの問題意識や思考の流れを予測するために、単元の構想図を次のように立てました。

『情報を生かして発展している産業』単元構想図



（3）目標と指導と評価の計画

小単元の目標と評価の計画を、以下のように設定しました。

❶小単元の目標

情報の種類、情報の活用の仕方などに着目し、我が国の産業と情報との関わりについての学習問題を見出し、聞き取り調査をしたり映像や新聞、インターネットなど各種の資料で調べたりしてまとめ、産業における情報活用の現状を捉え、情報を生かして発展する産業が国民生活に果たす役割を考え、表現することを通して、大量の情報や情報通信技術の活用は、様々な産業を発展させ、国民生活を向上させていることを理解できるようにするとともに、主体的に学習問題を追究・解決しようとする態度や、情報を生かした産業の発展や国民生活の向上について考えようとする態度を養う。

❷評価規準

【社会的事象についての知識・技能】

①情報の種類、情報の活用の仕方などについて、聞き取り調査や映像や新聞、インターネットなどの各種資料で調べ、必要な情報を集めて読み取り、産業における情報活用の現状を理解している。

②調べたことを図や文章などにまとめ、大量の情報や情報通信技術の活用は、様々な産業を発展させ、国民生活を向上させていることを理解している。

【社会的な思考力・判断力・表現力】

①情報の種類、情報の活用の仕方などに着目して、問いを見出し、産業における情報活用の現状について考え、表現している。

②情報を生かして発展する産業が国民生活に果たす役割を考え、表現している。

【主体的に学習に取り組む態度】

①我が国の産業と情報との関わりについて、予想や学習計画を立て、学習を振り返ったり見直そうとしたりして、学習問題を追究し、解決しようとしている。

②よりよい社会を考え、学習したことを社会生活に生かそうとしている。

❸指導と評価の計画

以下の通り。（16 ページに続く）

時数	○主な学習活動　◆期待する児童の反応	評価：評価方法
1	【身近な食品と情報との関わり】 ○既習の「産業における情報活用」について想起する。 ○２つのモナカアイスクリームの鮮度の違いに気づかせ、情報との関連性について話し合う。 ◆アイスクリームを作る会社は、新鮮なモナカアイスクリームを届けるために、どのような情報を活用しているのだろう。	主①：ノート記述、発言内容
2	【気象情報を活用する理由】 ○アイスクリームを作る会社が困っていたことと、その解決の仕方を考える。 ○アイスクリームを作る会社が「日本気象協会」から情報を提供されていることを知り、産業と情報との関わりについて学習問題を作り、予想をもつ。 ◆アイスクリームを作る会社がちょうどよい生産量を決めるために、日本気象協会はどのような情報を提供しているのだろう。	主①：ノート記述、発言内容

時数	○主な学習活動　◆期待する児童の反応	評価：評価方法
3	【日本気象協会の情報収集】 ○日本気象協会の主な仕事について調べる。 ○日本気象協会で扱う情報の種類や、その収集方法や活用の仕方を調べる。 ◆日本気象協会は、アイスクリームを作る会社のために気象情報だけでなく、様々な情報を収集して気象売上予測を作成している。 ○気象売上予測から必要な情報を読み取る。	知①：ノート記述、発言内容
4	【気象売上予測の活用】 ○気象売上予測を読み取り、生産量を決めるにはどのようにしたらよいかを考える。 ◆気象売上予測を見ると、昨年よりも今年の方が気温が低いことがわかる。だから生産量も減らした方がいい。 ◆気象売上予測を使うと、ちょうどよい生産量を決めるための正確な判断ができる。 ○自分たちの判断とアイスクリームを作る会社の判断を比べ、実際の活用方法を知る。	知②：ノート記述 (資料の読み取り)
5	【日本気象協会の人の仕事】 ○アイスクリームを作る会社での気象売上予測の活用の仕方について、資料から調べる。 ○複数の資料を組み合わせながら、日本気象協会の人の工夫や努力について話し合う。 ◆日本気象協会は、よりよい情報を提供するために、人の経験も生かして情報を活用している。	思①：ノート記述、発言内容
6	【食品の生産販売で活用される気象情報】 ○気象情報を活用している豆腐会社の豆腐作りについて調べる。 ○豆腐会社で活用されている気象売上予測を読み取り、生産量を決めるにはどのようにしたらよいかを考える。 ◆日本気象協会は、それぞれの会社が活用しやすいように気象売上予測を工夫したり改善したりしている。 ○日本気象協会の人の話と資料から、気象情報の活用の仕方や可能性を知る。	知②：ノート記述、発言内容
7	【気象情報を活用して発展する産業】 ○気象情報を活用している産業について、調べてきたこと、資料をもとに考えたことを伝え合う。 ○日本気象協会の人の意見から気象情報を活用すると実現する未来について想像し、自分の生活がどのように向上していくか考える。 ◆気象情報を生かして売れる量が予測できると、季節ものの食品を作りすぎることがなくなり、食品ロスを減らすことにつながる。 ○学習したことを生かして、情報と人との関わりについて考えを持つ。 ◆気象情報など様々な情報を活用することでよりよい商品が生まれたり、私たちが手にしたりすることができ、生活が豊かになる。	主②：ノート記述、発言内容 思②：ノート記述 (短作文)

2 指導と評価の実際

（1）学習状況を見とり、個々の指導に生かす評価

子どもが主役の問題解決的な学習を展開していくために、本実践の評価で最も力を入れたのが、「C（努力を要する）」の子どもを見とり、「B（おおむね満足できる）」へと引き上げることです。

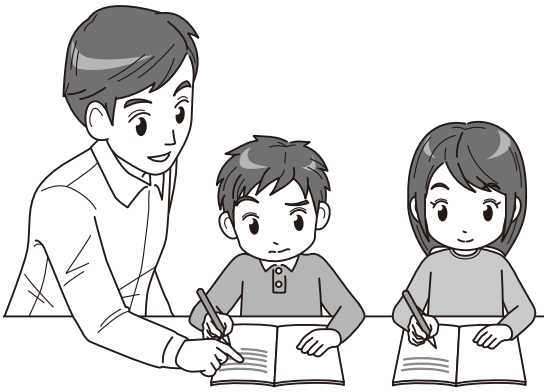
平成 29 年告示の学習指導要領では、身に付けた知識・技能を活用することを求めています。また、社会科の問題解決的な学習は子どもの学びのストーリーです。その主人公であるべき子どもが学習についてこられていない状態では、問題解決のストーリーは成立しません。

そこで、活用できる知識・技能を確実に身に付けさせ、C 評価となる子どもを出さないようにするために、次の３つの手立てを工夫しました。

❶「問い」の表出

子どもの素朴な「問い」の表出を促し、問題意識を持たせる

授業を通して浮かんだ「問い」は、自由に「？」マークで記述させました。そして机間指導やノートチェックをするときに「？」マークを確認することで、子どもの「問い」を見とっていきました。



社会科の授業では、子どもが思考をめぐらせているときのささいなつぶやきが、授業の核心にせまることがあります。子どもの様子を観察し、「今、頭の中でモヤモヤってなっている心の声を、はてなマークをつけて書いてみて」などと「問い」の表出を促すことが必要です。つぶやきを文章に表現することで、改めて自分の問題意識を自覚できるからです。さらに、自覚した「問い」を友達と交流し合うことも必要です。交流し合うことで、問題解決の方向が定まり、問題解決のストーリーに乗り遅れた子どもに問題意識を持たせることができるからです。

❷観点に応じた振り返り

評価の観点に応じて振り返りの書き方を指定し、子どもの学習状況を見とりやすくする

◇《知識・技能》⇒キーワードを書かせる

「気象売上予測」「生産量」などといったキーワードを指定して短作文を書かせ、学習内容を意味的に理解できているのかを見とりました。

◇《思考・判断・表現》⇒根拠を書かせる

「自分の考えの根拠」や「考えが変わったきっかけ」を短作文に書かせ、児童の思考や判断を見とりました。「資料番号」や「友達の名前」を短作文の中に書かせることで、具体的な表現につながりました。

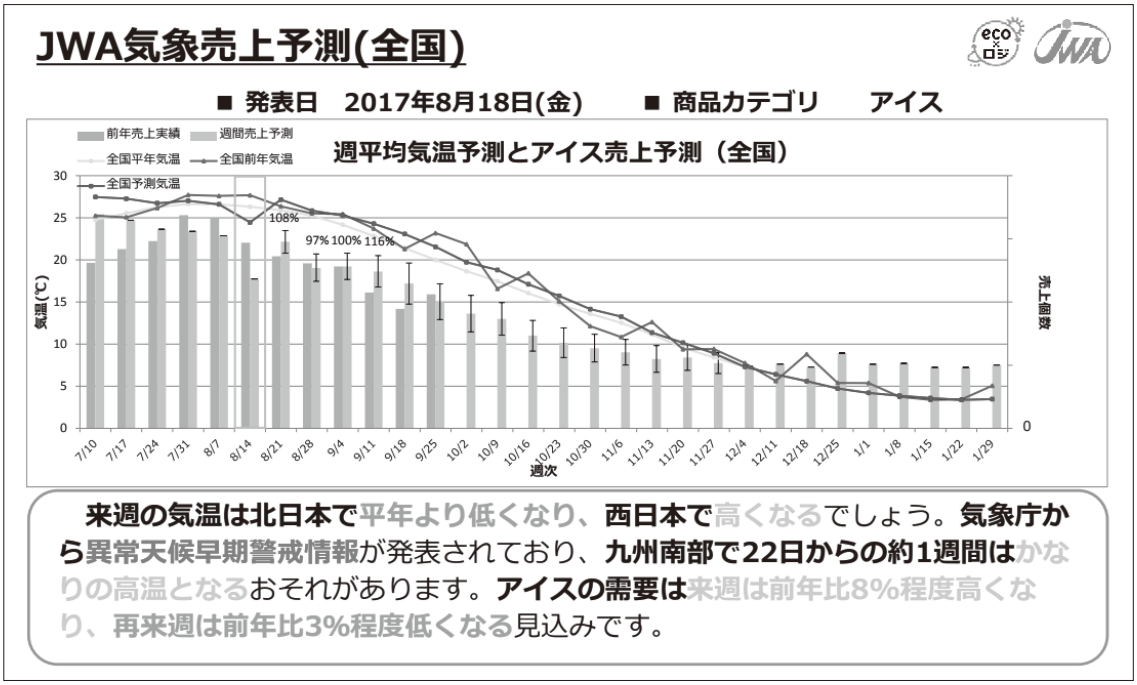
◇《主体的に学習に取り組む態度》⇒比較を書かせる

「前の自分の考えと比べて」短作文を書かせることで、児童の思考の流れや変容を見とりました。

❸ささいな声かけ

子どもの表情、身振り、ささやきを観察・傾聴し、ささいな声かけをする

上記❶❷のように、一人一人の学習状況を見とるためには、子どもの考えを表出させることが必要です。しかし、「C（努力を要する）」の子ども



ほど自分の考えを表現することが苦手です。そこで授業以外の時間でも「あの時うなずいていたけれど、○○さんの意見に賛成だった？」などと問いかけたり、「そんなことを思っていたんだね。面白いなあ」と価値づける評価をしたりしました。

「この資料、難しくなかった？」と休み時間に子どもに問いかけることもありました。すると普段大人しい子でも不思議と自然に話をしてくれます。このようなささいな声かけも指導に生かせる評価の一つであると考えています。

（2）観点ごとの見とりと評価

《知識・技能》／

〈知－①〉では、子どもの実態を踏まえ、具体的な評価規準（「目指す子どもの姿」以下省略）を「日本気象協会は産業に生かすために、多様な情報を収集して気象売上予測を作成していることを理解している」とし、ノート記述や発言内容から見とり評価しました。収集した情報の多様性を理解しているものをＢ（おおむね満足できる）、「SNS のデータは、人による気温の感じ方の違いを分析するために集めている」など、様々な情報を収集する意図にまで理解が及んでいるものをＡ（十分満足できる）と判断しました。

〈知－②〉では、具体的な評価規準を「資料を読み取り、生産量を決める判断材料として気象売上予測（上の図）を活用していることを理解している」と捉え、ノートの記述から評価しました。「昨年よりも気温が低いから、昨年よりも生産量は減らした方がよい」など気象売上予測を読み取り判断している子どもをＢとしました。

情報やデータは実体がないため、子どもにとっては捉えにくい内容です。そこで、「C（努力を要する）」の子どもをＢへと引き上げるように、指

導に力を入れました。具体的には、一斉指導で気象売上予測を読み取る時間を十分に確保したり、前時の終わりに気象売上予測の資料を配布し、休み時間等に努力を要する子どもへの個別指導を行ったりして資料の読み取り方をフォローしました。その結果、すべての子どもをBと評価することができました。また、「梅雨に入ると買い物に行かなくなるので、気温だけではなく天候にも気をつけて生産量を決めていると思う」など気象売上予測と他の情報を関連づけている子どもについてはAと評価しました。

《思考・判断・表現》

〈思－①〉では、具体的な評価規準を「企業における情報活用の現状を捉えることで、人の働きに気づき、その努力や工夫について考え、表現することができる」とし、ノート記述や発言内容から評価しました。社会事象の背景にある「人」の役割に目が向く場面であるため、重点を置いて評価しました。

「日本気象協会は、情報の使い方と人の使い方がうまいから、気象売上予測をよりよいものにしていける」など、「情報」と「人」の両面に目を向けた記述をBと判断し、それに加えて「人には、相手の会社の意見を聞きながら工夫することができる」「人には、それぞれが積み重ねてきた経験がある」「人の手が加わると安心できるし、信頼できる」など「人」の働きの意味についても記述している子どもをAと判断しました。

この評価場面では、「情報」の役割から「人」の役割へと視点が転換するため、複数の子どもが問題解決のストーリーに乗り遅れることが予測されました。そこで、本小単元の当初から「情報ではなく、情報を扱う『人』が大切だ」と考えていた子どもに発言を促し、子どもたちの視点が「情報」から「人」へと自然に転換するようにしました。本時を迎える前から、その子の意見をノートのコメントや授業後の声かけで価値づけたり、「後でくわしく教えてね」と勇気づけたりしてきたことで、その子の個性的な意見を生かすことができました。小単元の要所を捉え、見とった児童の意見を計画的に生かすことで、努力を要する児童への支援にもなりました。

〈思－②〉では、具体の評価規準を「産業における情報活用のあり方とそれらが国民生活に果たす役割を多角的に考え、表現している」とし、ノート記述や発言内容から評価しました。ここでの評価は〈主－②〉とも重なるため、本小単元では〈思－①〉の評価を重視し、〈思－②〉では評価の区分を2つ（CかB以上）に分類して評価しました。

《主体的に学習に取り組む態度》

〈主－①〉では、具体的な評価規準を「産業と情報との関わりについて企業の抱える課題をつかみながら、主体的に学習問題を解決しようとしている」とし、ノート記述や発言内容から評価しました。本小単元は学習が進むごとに「問い」が鮮明になるよう設計したため、子どもの「問い」の変容に着目して評価しました。〈主－①〉の評価場面は第1時、第2時としていますが、子どもが学習展開に応じて「問い」を調整したり深めたりしているかを小単元全体で評価しました。A児は、問いを次のように深めていきました。

①パリパリにするためにどんな情報を使っているのかな？
②天気予報は100％的中するわけではないからもし外れたらどうするのかな？
③日本と海外では、気温も違うのだから海外のデータを集める必要性はあるのかな？
④機械には人の心は分からないけど、正確に予測ができる。それなのになんで企業は日本気象協会がつくった予測をもっと活用しないのかな？　（A児）

A児は、「情報」に対して疑いの「問い」を持っていましたが、学習を進めるなかで「情報」に対して肯定的な「問い」を持ち始めました。A児のように、事実認識が深まる度に「問い」を柔軟に深化させている子どもをA評価とし、「問い」を事実認識に応じて深化させられない子どもをBと評価しました。

「問い」を言葉で表現できない子どもには、振り返りの時間に、自分の「問い」を表出できるように個別に支援をしました。

〈主－②〉では、具体的な評価規準を「産業における情報活用のあり方について、学習したことを生かして主体的に考えようとしている」とし、ノート記述や発言内容から評価しました。

評価場面は、学習問題の追究場面だけでなく、学習したことを社会生活に生かそうとする場面でも評価をしました。

学習したことを社会生活に生かそうとする場面では「情報のよさを生かす」と「社会の課題を解決する」の2つの着眼点で見とりました。「雪が多いかを予測してスタッドレスタイヤの生産量を決めるといい。タイヤは年が経つとダメになりやすいと聞いたことがあるから、作りすぎると無駄になる」など、2つの着眼点で捉えている子どもをAと評価し、1つの着眼点から捉えている子どもをBと評価しました。

（3）評価場面の厳選と記録に残す評価

評価記録の残し方で意識したことは、評価場面を厳選し、軽重をつけることです。働き方改革が求められるなか、評価情報を、無理なく、無駄なく、効果的に記録に残すことが必要です。

子どもの思考の変容を見とるには、小単元の導入と終末などに評価場面を設定することが考えられます。さらに、展開場面にも評価場面を設定することで、子どもの思考が変容した「きっかけ」を捉えやすくなります。

本小単元であれば、気象情報を活用する「人」の目的や意図が見えてくる場面、つまり、問題解決のストーリーが転換する場面での評価を重点的に行いました。このような「事実の裏側に目を向ける場面」「事実認識が多面的になる場面」「他者の考えに出会う場面」など、問題解決のストーリーが転換する場面では子どもの思考が変容しやすくなるため、その場面を重点的に評価することが考えられます。

これらの評価情報の記録の残し方にも工夫が必要です。代表的な意見やキーワードだけを記録に残したり、ICTを活用したりするなど、1年間継続できる記録方法を工夫していく必要があります。

「これならできる」評価を考えていく本稿では、あえて、記録に残す評価を一度だけで行うにはどうしたらよいのかを提案します。前述したような評価を行った上で、さらに、小単元末に以下のようなプロットを提示して短作文を書かせます。

①最初は、＿導入の考え＿と考えていた。
②けれど、＿終末の考え＿と考えるようになった。
③なぜなら、＿展開のきっかけ＿からだ。

子どもが今までのノート記述を振り返り、自分の考えを再構成する時間にもなり、自己の変容を自覚することにつながります。

本小単元では、上記の短作文で〈思－②〉を評価しました。実際にB児とC児が書いた「産業

における情報活用」についての記述（一部抜粋）とその評価は、次の通りです。

①最初は「アイスなんて食べられればいいでしょ」と思っていた。
②けれど、アイスの裏にはすごく頑張っている人がいると考えるようになった。
③なぜなら、会社は売れる商品を作るために、作り方だけではなく、日本気象協会のように色々なデータを扱う会社とも協力して、よく売れる時期や売れない時期を考えているから。一つの商品の裏に本気で働いている人がたくさん関わっていると思った。
（B 児）

情報を生かして産業が発展していることや、それを支える人の働きに目を向けていますが、「国民生活に果たす役割」については十分に表現できていないため、B と評価しました。しかし、ノートの別の記述に「情報を生かすと未来を予測できるし、生活が楽になる」という記述が見られたため、評価を A に修正しました。

①最初は、モナカアイスはただおいしいアイスで売上も高いと思っていた。
②けれど、売上が低いときもあると考えるようになった。
③なぜなら、情報を使うと様々な「得」があるので人が困らなくなるからだ。　（C 児）

「国民生活」には目を向けていると読み取れますが、全体として文意を捉えられませんでした。そこで、C 児に問いかけてみました。本人の書きたかった内容は「品物の需要が変動するなかで、売上を維持するには情報の活用が必要である。情報を活用して企業の売上が上がると、私たちもよい品物を手に入れることができる」という内容でした。文章表現という言語技能の観点からは A と評価できません。しかし、子どもから聴き取った内容は十分 A と判断できるため、そこで最終的には、A の評価としました。

（4）観点別評価の総括

本小単元の総括的な評価は次のように行いました。

《知識・技能》
ペーパーテスト中心。〈知－①〉の評価を加味する。
《思考・判断・表現》
〈思－①〉はノート。〈思－②〉は短作文。
《主体的に学習に取り組む態度》
〈主－①〉はノート記述の変容。

上記の〈知－①〉〈思－①②〉〈主－①〉についてはすべての子どもの評価を記録に残しました。そして、もう一つの小単元と併せて、単元全体として総括的な評価を行いました。

9 個に応じた指導の充実と個別最適な学び

1 個に応じた指導と個別最適な学びの関係は？

これまでの社会科において、心ある教師は、単元を通した問題解決的な学習の過程での評価に力を入れ、「努力を要する」状況と判断した子どもに対してその都度手厚く指導・支援を行うなど、すべての子どもが単元の目標を実現できるよう、評価に基づく個に応じた指導に力を入れてきました。この“評価に基づく個に応じた指導”について、これからの社会科では、どのような指導に力を入れたらよいのでしょうか。

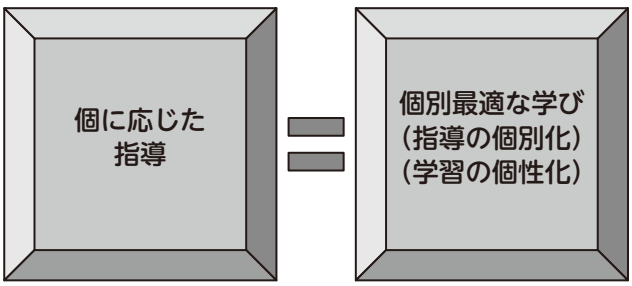
それを考えるヒントが「学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料」（令和３年　文部科学省初等中等教育局教育課程課）に示された次の記述です。

「指導の個別化」と「学習の個性化」を学習者視点から整理した概念が「個別最適な学び」ですが、これを教師視点から整理した概念が「個に応じた指導」です。学習指導要領の総則では「児童（生徒）の発達の支援」の項目において、「個に応じた指導」の充実を図ることについて示しています。「個に応じた指導」に当たっては、「指導の個別化」と「学習の個性化」という二つの側面を踏まえるとともに、ICT の活用も含め、児童生徒が主体的に学習を進められるよう、それぞれの児童生徒が自分にふさわしい学習方法を模索するような態度を育てることが大切です。

（これを図示すると下のようになります。）

2 「指導の個別化」では

“一定の目標をすべての子どもが実現できるようにする”ことが「指導の個別化」の究極のねらいです。それを実現するには、教師が子どもの学習状況をきめ細かく見とり評価して、支援が必要な子どもに対してより重点的な指導を行うなどの効果的な指導を行うことや、子ども一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じて指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うなど、個々の子どもに適した方法で学ぶことができるようにしていくことが大切です。



3 「学習の個性化」では

個々の子どもの興味・関心等に応じた異なる目標に向けて学習を深め、広げることが「学習の個性化」のねらいです。それを実現するには、子どもが自ら学習活動や学習課題を選択する機会を設け、個々の子どもが個性や特性に応じた学習に取り組めるよう工夫していくことが大切です。

4 「個別最適な学び」の充実を目指して

評価に基づく個に応じた指導については、これまで通りでも決して不足はありません。これに加え、学習者の視点に立ち「どの学び方が自分に合っているのか」などと子どもが自分に問いかけ、最適な学びとなるよう調整するなど「個別最適な学び」の充実を図る指導にも力を入れていくことが、新たに求められています。

この「個別最適な学び」の推進に当たっては、ICT 活用の特性・強み、例えば、文書の編集作業やプレゼンテーション、情報検索や共有などが容易であること、思考の可視化や共有、送受信が瞬時に行えることなどを積極的かつ最大限に生かしていく工夫・努力が、今強く求められています。

10 協働的な学びへと誘い込む“よさや可能性の見とりと評価”

1 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実

社会科の授業づくりでは、問題解決的な学習の過程において、“個別最適な学びの成果を協働的な学びに生かし、その成果を個別最適な学びに還元する”など、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」が求められています。そのポイントについて、第３学年「工場の仕事」を例に挙げ、具体的に述べていきます。

ある小学校の学区内にあるかまぼこ工場では、独自の製造方法で良質のかまぼこを作り続け、他のかまぼこ工場にはない独自のよさを醸し出しています。

1.単元の導入

学区内の工場と他の工場のかまぼこの違いを実物の比較などから実感し、「おいしそう！この違いはどこからくるの？原材料の魚？調味料？作り方？」などの素朴な問いや疑問を引き出し『おいしいかまぼこづくりのひみつをときあかそう』という学習問題を設定します。そして、個々が気になっていることを解き明かす方法として、工場見学、Mさん（作っている人）に聞く、資料で調べるなど追究の仕方やカードへのまとめ方を話し合い、各自の問題解決の見通しを立てます。

2.単元の展開①：問題追究の第１段階

工場見学、工場で配られた資料調べなどから、おいしいかまぼこのひみつにつながると考えたことや気になること・疑問点などをカードに書き出します。「季節によって仕入れる魚の種類が違うのはなぜ？」「夏、石臼を氷で冷やすのはなぜ？」「二人組で服装を見合っていたが、何をしていたの？」などです。それらをMさんに質問します。そして、ここまでの自力の追究で導き出した学習問題に対する自分独自の答えを「おいしさのひみつはズバリこれ！」カードに表現します。

ここまでのプロセスで大事にしたいのが個別最適な学びです。すべての子どもが学習問題に結び付く驚きや疑問、気になること（こだわり）を持ち続け、自力で追究活動を行い、学習問題に対するその子らしい独自の考えを「おいしさのひみつはズバリこれ！」カードに表現できるよう、個々の学習状況をきめ細かく見とり評価し、子どもの個性的な学び（よさや可能性）を引き出し伸ばしていくよう、意図的に働きかけます。

3.単元の展開②：問題追究の第２段階

教師の出番がやってきました。「おいしさのひみつはズバリこれ！」カードの評価情報を活用し“個別最適な学びの成果である子どもの個性的な学びを生かした協働的な学び”へと子どもたちを誘い込むのです。

まず、子どもがカードをタブレット型端末上に投稿して互いのカードを比べる活動（考えの共有）を行い、違いや共通点に気付くよう働きかけます。次に、似ているカードを選んで分類し、「地元の新鮮な魚と調味料」「鮮度を保つ石臼」等の題名をつけながらMさんのこだわりを考える活動（意味の思考）や、「どれか１つが欠けたらどうなるか」「おいしさに直接つながらないカードはなくてもいいのか」を考え、様々な側面や角度から意味を掘り下げる活動（吟味）へと子どもを導きます。それを効果的に行うため、その子独自の子どもらしい考えのよさや可能性を見とり評価し、その効果的な生かし方を事前に考え授業に臨むことがポイントです。

4.単元のまとめ

自分の考えがどう変わったのか、それはなぜかを振り返るなど、協働的な学びの成果を個別最適な学びに還元し、一人一人が自己の成長や学びの手応えを実感できるようにすることが大切です。

個別最適な学びと協働的な学びの充実を目指す評価の実際

～ICT活用による“全員参加の授業づくりと一人一人のよさや可能性を生かす”指導と評価の工夫～

では、再び現場の先生の実践を見ていきましょう。

1 社会科における個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実

個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図った社会科学習とは、次の学習の流れ（図1）ではないかと捉えました。

図1 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図った学習の流れ

①子どもたち一人一人が解決すべき課題をもつ。※学習問題・学習計画を設定する。
②課題解決に向け個別に追究活動を行う。※学習問題を解決するために調べる。
③他者との対話を通して追究したことを多角的に考察する。※学習問題の結論をまとめる。
④よりよい課題の解決方法を吟味・検討していく。※学習内容をいかす。

このように整理してみますと、問題解決的な学習の過程において、**「個別の追究活動」**や**「他者との対話」**などの学習活動を取り入れることで、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図ることができるのではないかと考えました。そして、これらの学習活動を取り入れていくための手立ての１つとして、タブレット型端末の活用が挙げられるのではないかと考えました。

2 タブレット型端末の具体的な活用方法

タブレット型端末を含むICTを活用する利点は、次の❶～❹（図2）であると考えます。

図2 タブレット型端末（ICT活用）の利点

❶資料の配布を効率的にデータで送ることができる。
❷友達の意見をタブレット型端末上で共有することができる。
❸タブレット型端末上で学級全体やグループの共同作業ができる。
❹コメント機能などにより、相互評価をすることができる。

❶効率化

社会科の学習は資料が命であり、１単位時間において複数の資料を提示・配布することがあります。その資料のデータをタブレット型端末上に送信することで一斉に同じ資料を閲覧することができます。

❷共有化

例えば子どもがノートに記述した内容を写真撮影し、同じフォルダやアプリケーションにアップロードすれば、タブレット型端末上で全員の考えを確認することができます。

❸共同化

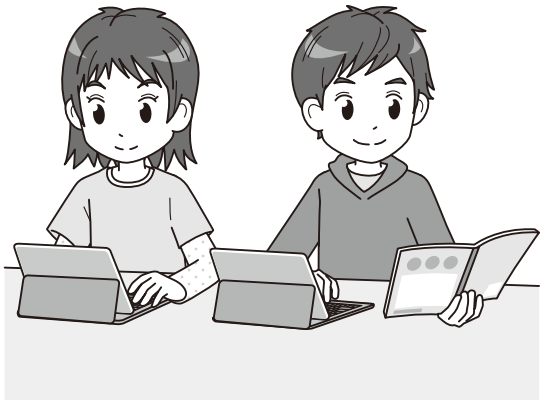
共有機能をもったアプリケーションを用いて、アンケートやスライド資料などをグループや学級全体で共同的に活用するなど、協働的に学び合うことができます。

❹評価

タブレット型端末上にアップロードしたノートや作品などに対して、コメント機能を用いて子どもが相互評価を行ったり、教師が授業中にみんなの見とりを短時間で行ったりすることができます。

こうしたタブレット型端末による**「効率化」「共有化」「共同化」「評価」**を工夫すれば、個別の追究活動や他者との対話の時間を確保でき、個別最適な学びと協働的な学びが実現できると考えました。

そして、タブレット型端末を活用し、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図るための具体的な実践として、第５学年「これからの工業生産」に取り組みました。



3 単元構想

【第５学年「これからの工業生産」】

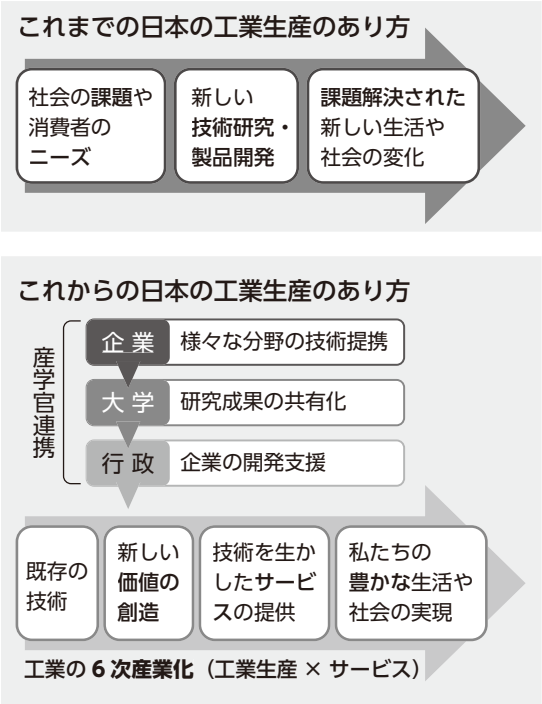
本小単元は、工業生産に関わる人々の働きや工夫・努力に関する内容です。ここでは製造の工程、工場相互の協力関係、優れた技術などに着目して、地図帳や地球儀、各種の資料で調べ、まとめ、工業生産に関わる人々の工夫や努力を捉え、その働きを考え表現することを通して、工業生産に関わる人々は、消費者の需要や社会の変化に対応し、優れた製品を生産するよう様々な工夫や努力をして、工業生産を支えていることを理解できるようにすることがねらいであると考えました。

情報通信技術などの発展により、ＩｏＴやＡＩ技術の活用など工業生産のあり方も変化しています。社会が大きく変わるなか、既存の工業製品や製品開発で培った技術をこれからの社会にどのように生かすことができるのか、新たな価値の創造やサービスの提供が求められています。その実現を図るためにこれからの工業が目指すべき１つの姿が、様々な知識や技術の融合であり、企業だけでなく、大学や研究機関、行政機関などの協力・協働による産学官連携であると捉えました（図３参照）。

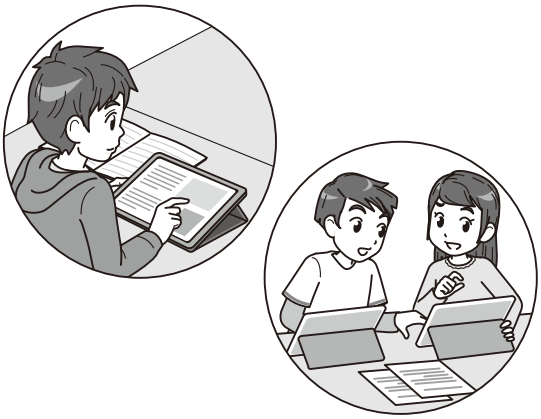
これらを踏まえ、本小単元ではハウスメーカーを事例に挙げ、日本の工業生産の「これまで」と「今」を比較し、それを生かして「これからの工業生産のあり方」に目を向けていくことにしました。

そして、これらの学習内容を振り返り、「これからの日本の工業生産は期待できるのか」推理していく単元構想（P.26 図４）を作成しました。

図３ これまでの工業生産と、これからの工業生産のイメージ図



この単元構想図の追究の過程に「指導の個別化」と「協働的な学び」を、いかす過程に「学習の個性化」と「協働的な学び」をそれぞれ組み込んだ授業実践を行いました。



問いをもつ過程

私たちと自動車工業との関わり	環境問題・高齢化など**社会の課題解決**や**消費者のニーズ**にこたえた自動車の開発が行われてきた。	⇔	新しい自動車開発の具体例	埼玉県でも自動運転技術の研究が行われており、**自動運転バスの運用実験**などが行われている。

!	?
自動運転バス運用実験に関連する会社	
!	?

第１時【問い】どうして、自動運転バスの運用実験に様々な会社が協力しているのかな？

自動運転技術は**人々の生活や社会を大きく変える**可能性がある。そのため、どのように社会の中で生かしていくことができるのか**新たな価値（サービス）を創造**することが課題である。

自動車工業以外にも、私たちの生活と大きく関わりのある工業の１つに住宅工業があるよ！

学習問題 工業生産によって、私たちの生活や社会はどう変わっていくのだろう。

追究する過程

第２時【問い】ハウスメーカーは、どのような住宅をつくってきたのだろう？

①戦後、住宅が少ないなかでプレハブ住宅の生産を行うため住宅産業をはじめた。（**大量生産**）
②自然災害、高齢化、環境保全など様々な社会の課題を解決するための家づくりを目指していった。（**社会課題解決型工業生産**）
③一人一人の幸せを実現するため、お客さんに寄り添った家づくりの段階に入ってきた。（**顧客ニーズ対応型工業生産**）
④京都では、京の伝統工芸を受け継ぐ職人とともに新しい住環境の開発を進める取り組みをしてきた。

第３時【問い】どうして、伝統産業を受け継ぐ職人たちと協力して家づくりをしたのかな？

○京都は昔ながらの日本の風景が残る地域であり、和を基調とした住宅はお客さんが求めたくなる住宅ではないか。
（**伝統技術を基にした、新しい価値を創造した工業生産**の変貌）
○既存の技術のなかでも、**AI 技術**は様々な産業に生かし多様なサービスを提供できる技術だよ！

まとめる・いかす過程

第４時【問い】工業の発展により、私たちの生活はどのように変わってきたのだろう。

①**機械やロボットなどの技術開発**が進み、私たちの生活を支える工業製品が増えてきた。
②これからは様々な技術をどのように私たちの生活や社会に生かすことができるのか、**新しい価値（サービス）を創造**していく必要がある。

第５時【問い】これからの日本の工業生産は期待できるのか。

①伝統産業など受け継がれてきた知識や技術を活用して**新しい工業製品の開発**をしているので、日本の技術力に期待できる。
②**企業や大学、研究所等の研究成果を相互活用**しながら、新しい価値（サービス）を創造した工業生産の研究・実験が進んでいるので、**私たちの生活を豊かにしてくれる**と期待できる。

図４ 単元構想図【これからの工業生産】

4 指導の個別化と協働的な学び

本実践の第２時の目標を「様々な資料の読み取りから、社会の課題解決に向けたハウスメーカーの製品開発について理解する」とし、学習課題を「ハウスメーカーは社会の課題を解決するために、どのような住宅をつくってきたのか」としました。

現代社会の解決すべき問題は多岐にわたり、それらの解決に向けた製品開発も多様です。

そこで第２時では、「社会の課題解決に向けた製品開発」という**共通の学習目標**の解決に向けて、子どもが読み取る資料を選択しました。この各自が資料を選んで調べる学習が「**指導の個別化**」に当たると考え、以下の手立てを工夫しました。

◇教師が❶耐震住宅（災害問題）、❷環境配慮型住宅（環境問題）、❸ユニバーサルデザイン住宅（高齢化問題）の３つの資料（P.27 図５を

図５ 実際の資料（一部）

参照）を用意する。

◇子どもが前の❶～❸から求める資料を選択し、追究活動を行う。その際、子どもによって学習進度に差異が生じるため、個々の学習状況に応じて次の❶～❹（P.27 図６）に留意して指導する。

図６ 指導の個別化の指導上の留意点

❶進度の早い子どもには、「すべての資料の読み取りを行う」「インターネットで別の資料を見つける」などの指示を行う。
❷進度がゆっくりな子どもには、「友達の意見を参考に読み取りを行う」「ゲストティーチャーに相談する」などの指示を行う。
❸教師は個別の支援が必要な子どもを中心に読み取りの指導を行う。
❹友達の意見を参考にするため、タブレット型端末上で読み取った内容を共有できる環境を整備する。

❶～❹の中で特に重視したのは、個別の支援が必要な子どもに対する手立てです。

第２時の評価規準は「社会の問題解決に向けたハウスメーカーの取り組みを理解している」であり、１つ以上の資料をもとに具体的な取り組みを理解することを目的としています。その実現に向け、子どもが少なくとも１つの資料を的確に読み取れるようにするために、「教師が支援をする」「友達同士で協力して調べる」「友達の考えをタブレット型端末で共有する」などの手立てを取り入れました。

このように、共通する目標をどの子も達成できるようにする教師の支援や環境整備が必要です。

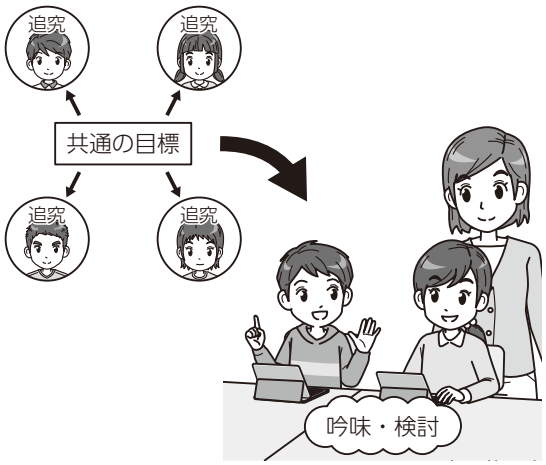
さらに、個別に追究したことを洗練させていくために、調べたことをタブレット型端末上で共有し、互いの調べたことを見合うようにしました。

この学習を通して、別の資料を読み取る、新たな資料を見つけ調べるなど、複数の事実を根拠にして自分の考えを導き出そうとする子どもたちの姿も多数く見受けられました。

このように、「指導の個別化」と「協働的な学び」の充実を図るためには、共通の目標に対して、個別に追究する時間を設け、追究したことを互いに吟味・検討しながら課題解決を目指すこと（図7参照）が有効であると考えます。

図7 指導の個別化と協働的な学びのプロセス

①共通の課題（目標）を設定する。
②課題の解決に向け資料を子どもたちが選択し、個別の追究活動を行う。
③本時の目標達成に向けた進度によって、教師（＋友達）が支援を行う。（学習状況評価）
④友達の調べたことについて、タブレット型端末上で吟味・検討をしていく。
⑤子どもたち同士で、相互評価を行う。
⑥複数の資料から、社会的事象の意味を理解していく。



5 学習の個性化と協働的な学び

第４時の終末段階において、「今後の日本の工業生産は期待できるのか」と子どもたちに問いかけました。

様々な事例を学習するなかで、「日本の工業生産の発展に対して前向きに捉える子ども」と、「日本の工業生産の課題に気付き、今後の展望に不安を感じる子ども」との間で意見が分かれました。

そこで、「これからの日本の工業生産は期待できるのか」という次時（第５時）の学習課題を設け、“次回までに、自分の考えをタブレット型端末にまとめること”を家庭学習の課題としました。

「期待できる！」と考える子どもは、「大学や企業の新しい製品開発」や「ＧＤＰの成長率」などの資料を、「期待できる？」と半信半疑の子どもは「日本の少子高齢化」や「有限資源の可採年数」など自力で収集した資料を、それぞれ自分の考えの根拠として示していました（図8参照）。

図8 子どもたちが作成したスライド（一部）

写真：大学や企業が開発している工業製品

例えば、農業をサポートしてくれる機械が増えています。また、二酸化炭素を吸収する機械など環境をよくしてくれる工業製品も開発されています。
若い人たちが、色々なアイディアを出して、新しい開発をしていくのではないかと思ったので「期待できる！」にしました。

図：有限資源の可採年数

左の図は、石油・石炭・天然ガスなどの使える年数を表したものです。

資源がどんどん少なくなっていくと、工業とかにもえいきょうがでてくると思います。
また、資源をつくろうとしても１からつくるのは大変で、あまり多くは生み出すことができないと思います。資源はいつかはなくなるかもしれないので、「期待できる？」にしました。

次時（第５時）の学習目標は、「学習内容をもとに、今後の日本の工業生産の展望について自分なりの考えをまとめ、表現する」としました。

この学習では未来の日本の姿について、子どもたちが“学習内容を生かして自分なりの答えを構想していくこと”を目指しました。そのため、課題に対する結論というのは、子どもたちによって異なります。つまり、共通の学習課題に対して、個々の子どもが各自の答えを導き出すのです。これが「学習の個性化」に当たると考えました。

この第５時では、「期待できる！」「期待できる？」という両者の意見を聞きながら、課題に対する結論を学級全体で討論しながら考えていきました。

子どもたちは対話していくなかで、「日本は新しい工業製品を開発する技術力はある。でも、エネルギーや資源が足りないからずっとできるのか不安である」という互いの意見を交えた深まりのある考えを生み出していきました。

この学習では、事前に全員がタブレット型端末にそれぞれの考えをまとめたスライド資料を作成し、効率的に全員の意見の可視化・共有化を図ることができました。

また、事前に家庭学習で資料を探したり、考えをまとめさせたりすることで、対話を中心とした学習活動を行うことができました。右の写真１～３が、その授業場面の一部です。

本実践では、対話を中心とする協働的な学びを行うことで、課題に対するそれぞれの考えを吟味・検討する時間を確保することができました。そして、両者の考えを取り入れ多角的に考察・構想する十分な時間を保障することができました。

タブレット型端末を活用し、子どもたちが自分の考えを家庭学習で事前にまとめ、授業では対話を中心とした学習活動を行うことで、「学習の個性化」と「協働的な学び」を充実させることができるのではないかと考えます（P.30 図９参照）。

写真１ アンケート機能による考えの可視化・共有化（例）

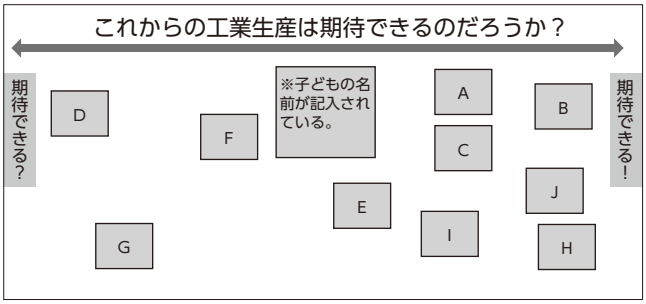


写真２ タブレット型端末上での考えの比較

写真３ 学習の振り返りをクラウド上に保存

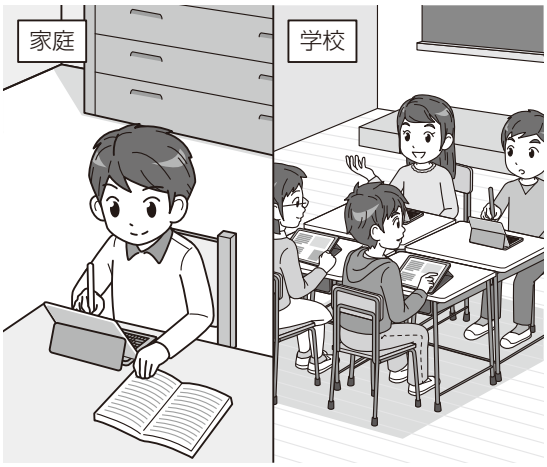


図9　学習の個性化と協働的な学びのプロセス

❶共通の課題（目標）を設定する。
❷課題の解決に向け資料を収集し、個別の追究活動を行う。※本実践では家庭学習
❸本時の目標達成に向けた進度によって、教師が支援を行う。（学習状況評価）
❹子どもたち同士で、相互評価を行う。
❺学級全体で、子どもたちの考えを発表し、吟味・検討していく。
❻吟味・検討した内容を踏まえ、一人一人の課題に対する答えをまとめる。

6　ＩＣＴの活用と指導に生きる評価

「これからの工業生産」の授業実践を基に、タブレット型端末を活用した個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実の事例を紹介してきました。

タブレット型端末という ICT を活用することで、一人一人のよさや可能性を生かすための個別の追究活動を充実したり、全員が参加して他者の考えを吟味・検討する機会を確保したりするなどの授業改善を行うことができました。また、タブレット型端末を介して子どもたちの学習活動の進捗状況をリアルタイムで容易に把握できて、目標達成に向け効率的に指導を行うための**学習者（子ども）の見とり**が可能となりました。

学習者の見とりを教師が丁寧に、かつ迅速に行うことで、誰一人取りこぼすことなく授業に参加することができるのではないかと考えます。

学習評価とは学習「状況の」評価であり、授業の中で目標達成に向けた指導を的確に行うために、一人一人を評価するものです。この「**学習者（子ども）のための評価**」を計画的に行うことこそが、今強く求められていると思います。また、タブレット型端末の活用により、子どもの学習成果を手軽に蓄積することができます。それらを単なる記録として残すだけでなく、蓄積した成果を分析・活用し、一人一人の子どもに最適な学びを提供していくことが今後の課題であると考えています。

ここまで評価のことを学んできて、どう思った？
成績表のためにつけると思いこんでいたけれど、子どものためにも指導のためにもとても大切なことだということがわかったよ。
評価のこと、むずかしく考えすぎていたのかも。
うんうん
見とり評価をすることで、これまで「努力を要する」と判断された子どもにも、必要な支援をすることができるよね。
そうすることで、子どもも自信をもって学習に取り組んだり、考えを伝えたりすることができるようになるんじゃないかな。
社会科を好きになる子どもが増えそう！
単元のどこで、どんなところを見とり評価すればよいのかイメージできたから、次の単元で実践してみるよ。
子どもの成長を見とるのが楽しみだね！
みなさんも、評価を通して子どもと一緒に成長していきましょう！

おわりに

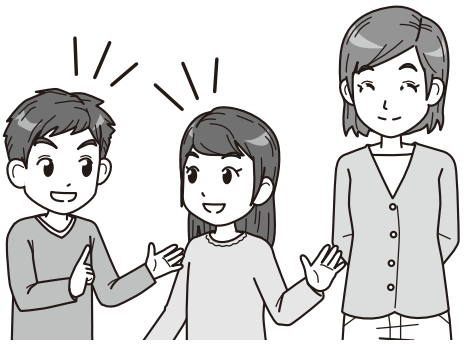
　あなたの日々の言葉かけで、子どもたちの学びはどのように変わりましたか？チェックしてみましょう。

- □ 「！」や「？」を素直に表出し、真剣な眼差しで『問い』と向き合い、自分らしい答えを導き出そうと奮闘している。
- □ 自信に満ち溢れ、自分が考えたことを堂々と他者に伝えることができるまでに成長した。
- □ 社会科は楽しい。次の時間が待ち遠しい。そんな社会科好きの子どもが増えてきた。

　･･･等々。

　“子どもたちが目を輝かせ、本気で学び合う”
そんな社会科らしい子どもの学びを支えているのが、社会科の学習評価であり、目指すべき評価の姿なのです。

　本書を手にしたあなたなら、いつか必ずそれができるはずです。自分を信じて、粘り強く頑張ってください。



安野　功(やすの　いさお)

國學院大學教授。埼玉県公立小学校教員を経て、2000(平成12)年から文部科学省初等中等教育局教科調査官(小学校社会科)として、学習指導要領の改訂に携わるとともに、現場で授業実践をしながら指導を進める。2009(平成21)年に退官。

2017(平成29)年発行の小学校学習指導要領解説社会編の作成委員。

日本文教出版発行『小学社会』の代表著作者。

ABCシリーズ第１弾もあわせてご覧ください！

授業力アップを目指す先生のための

社会科のABC

著者：安野　功

本書の主な内容

A 早わかり！ 社会科の学習内容

B これだけはおさえておきたい！ 授業づくりのポイント

C 身につけよう！ 指導技術

授業力アップを目指す先生のための
社会科のＡＢＣ～評価編～

日文教授用資料［小学校社会］
令和４年（2022年）12月16日発行

編集・発行人　佐々木 秀樹

日本文教出版株式会社
〒558-0041 大阪市住吉区南住吉 4-7-5
TEL：06-6692-1261
FAX：06-6606-5171

本書の無断転載・複製を禁じます。

CD33625

日本文教出版株式会社
https://www.nichibun-g.co.jp/

大阪本社　〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL：06-6692-1261　FAX：06-6606-5171

東京本社　〒165-0026 東京都中野区新井1-2-16
TEL：03-3389-4611　FAX：03-3389-4618

九州支社　〒810-0022 福岡市中央区薬院3-11-14
TEL：092-531-7696　FAX：092-521-3938

東海支社　〒461-0004 名古屋市東区葵1-13-18-7F·B
TEL：052-979-7260　FAX：052-979-7261

北海道出張所　〒001-0909 札幌市北区新琴似9-12-1-1
TEL：011-764-1201　FAX：011-764-0690